

令和八年度 入学試験問題

国 語

注意事項

- 一 問題冊子と解答用紙は、試験開始の合図があるまで開いてはいけません。机の上の受験番号が受験票の受験番号と同一であることを確認しなさい。
- 二 受験票は、受験番号が見える面を上にして、机の上の受験番号シールと並べて置きなさい。
- 三 受験票のほかに試験時間中机の上に置くものは、黒鉛筆（和歌・格言等が印刷されているものは不可）、鉛筆削り（電動式、大型のもの、ナイフ類は不可）、時計（辞書・電卓・端末等の機能があるものやそれらの機能の有無が判別しづらいもの、秒針音のするもの、キックシャープペンシル（黒い芯に限る。ボールペン付きは不可）、消しゴム、鉛筆削り（電動式、大型のもの、ナイフ類は不可）、時計（辞書・電卓・端末等の機能があるものやそれらの機能の有無が判別しづらいもの、秒針音のするもの、キックシャープペンシルや学習タイマー、大型のものは不可）、眼鏡、ハンカチ、目薬、ティッシュペーパー（袋又は箱から中身だけ取り出したもの）です。
- 四 解答用紙に、正しく記入・マークされていない場合は、採点できないことがあります。
- 五 携帯電話等の電子機器類は、必ずアラームの設定を解除し、電源を切っておきなさい。試験時間中にこれらをかばん等にしまわず、身につけていたり手に持っていたりすると不正行為とすることがあります。
- 六 また、試験時間中にかばん等の中で携帯電話等の着信音やマナーモードの振動音などが発生した場合には、監督者が本人の了解を得ずにかばん等を試験室外に持ち出し、試験本部で試験終了まで保管します。
- 七 監督者の指示があるまでは、試験室から退室できません。
- 八 監督者の説明を聞いて、正しい符号の問題冊子と解答用紙が配布されているか、確認しなさい。
- 九 試験開始の合図があったら、解答用紙の所定の位置に受験番号シールを貼り付けなさい。なお、氏名は、どこにも書いてはいけません。
- 十 問題は2ページから15ページまであります。試験時間中に問題冊子の印刷不鮮明、落丁・乱丁及び解答用紙の汚れ等に気づいた場合には、手を挙げて、すみやかに監督者に告げなさい。
- 十一 試験時間中気分が悪くなった場合は、監督者に申し出なさい。ただし、休養等に要した時間の延長は認めません。
- 十二 不正行為を行った場合は、その場で受験の中止と退室を指示され、それ以後の受験はできなくなります。また、同日に受験したすべての教科・科目の成績を無効とします。
- 十三 解答用紙は必ず提出しなさい。問題冊子は持ち帰りなさい。

〔一〕 次の文章を読んで後の間に答えなさい。(字数制限がある場合、句読点・記号も一字と数える。)

他者を理解すること。それはなによりもまず他者の行為を理解し、他者の言葉を理解することにほかならない。それゆえ他者とは、言うまでもなく、自らの意志によって自由に行為する他者である。それはたんに梢^(ア)が風のままにそよぐような運動でも、動物が目の前のエモノ^(イ)に条件反射的に飛びつくような本能レベルの行動でもない。

——だが、「自らの意志によって」「自由に」行為するとは、いったいどういうことなのだろうか。

他者の行為を理解すること。われわれはここで思いもかけない錯綜^(ウ)した議論の中へと分け入っていかねばならない。まず、ひとつのアポリア^{*}を提示することから、その扉を開いていこう。

手を上げてみる。私が為したのである。しゃっくりが出る。私が為したことではない。しゃっくりは私の身体に起こったことではあるが、私が自分の意志で為したことではない。その違いは明白であるように思われる。だが、どこが違うのか。

さまざまに起こるできごとは「誰かが為したこと」と「誰が為したのでもないこと」に分類される。風が梢を鳴らすのはいまのわれわれの見方では誰が為したのでもないこととみなされるだろう。では、猫が伸びをするのはどうか。それは猫の行為なのだろうか。それともたんなる自然現象なのだろうか。

⁽¹⁾ 猫論争¹が起きたとしてみよう。ある人はミケが伸びをするのはミケの行為だと主張し、ある人はそうではないと言う。甘えてすりよってくるのは意志によるが、寝起きに伸びをするのはたんなる条件反射だ、と。またある人は猫にはそもそも意志などありはしない。すべては状況に引き起こされた自然現象にすぎないと主張する。あるいは、うちのタマには意志があるが、おたくのミケにはないと言う人さえいるかもしれない。

問題は、どれが正解かではない。この論争はどういう質^{たち}のものなのか、それが問題なのである。例えば未知の惑星に降り立ったとする。そこで出会った一個の生物のごときものを取りあえずは「ポチ」と呼ぶとして、「ポチに意志はあるのか」と問う。問題は、どのような場合にこの問いにイエスと答えられ、どのような場合にノーと答えられるのかが分からないという点にある。とい

うのも、たとえ解剖してみたところで意志なる何ものかが見つかるみこみはないからである。それゆえおそらくこの問いは自然科学的問いではない。惑星探査隊の科学者がどれほど詳しく調べても、それで決着のつく問題ではない。だが、だからといって無益無用の問いというわけではない。あるものに意志があるのかないのか、あるべきことは誰かが為したことなのかそうではないのか、これはきわめて重要な違いとなるだろう。だが、それはどういう違いなのだろうか。

私が扉を開けるとき、扉が開いたことの原因は私にある。これは率直な実感である。これに対して、何かのヒヨウシに扉が開いてしまった場合、それは私が開けたのではない。「私が開けた」と言えるためには、扉が開いたことの原因は私であらねばならぬであろう。もし原因が彼にあるならば「彼が開けた」のであり、風が原因で開いたならば、われわれのツウネンに從えば、それはそもそも誰の行為でもない。これは、とりたてて言うまでもないあたりまえのことに思える。しかし、このあたりまえのことが、もう一歩踏み込んでみると謎めいてくるのである。

なによりもまず、「私が原因となって扉が開いた」という言い方で何が言われようとしているのか、その意味が問われねばならない。⁽²⁾例えば、私が突然意識を失い、倒れるときに扉を押して、それで扉が開いたとしよう。ある意味ではこれもまた、「私が原因で」扉が開いたことだと言われるかもしれない。しかし、これはけっして「私が扉を開けた」と言われうるような、私の行為ではない。だとすると、たとえ私に生じたできごとが原因でさらなる結果が生じたとしても、何か私のあずかり知らぬ形で生じてしまったできごと（失神、痙攣、あるいは催眠術にかかった状態等）が原因である場合には、それは私の行為と呼ぶにはふさわしくないということになる。

では、私が扉を開ける場合、それはどのような意味で「私が原因」であり、それゆえそれを私の行為とみなせるのだろうか。

甲

答えはおそらく、私が腕をのぼし、それによって扉が開いたから、というものだろう。それも、私の腕が痙攣を起こし、その運動で扉が開いたのではなく、私は私の行為として腕をのぼし、その結果として扉が開いたのでなければならぬ。だが、もしこのように説明されるのであれば、たんに問題は先送りされただけでしかない。こんどは、「私が腕をのぼす」という行為について同

じ問題が問われねばならない。

乙

私は腕をのばす。これに対して、痙攣などによって私の腕がまっすぐにのびてしまうこともありうる。その場合には私が腕をのばしたのではない。では、「私が腕をのばす」と言われるためにはさらに何が言われねばならないのか。そしてこれに対して、「痙攣などが原因なのではなく、まさに私が原因で私の腕がのびたのであれば、そのとき私は私の腕をのばしたのだ」と答えられるならば、われわれはそこで再び問われねばならない。「私が原因で私の腕がのびる」とはどういうことなのか。

私の腕がまっすぐにのびたことが私の行為であるとされるために必要とされる原因、それこそが私の意志だ、そう言われるかもしれない。そうすると、私の腕がのびたことに先立って、私は私の腕をのばすよう意志し、それが原因で私の腕がのびるというできごとが引き起こされたのだ、ということになるのだろうか。

丙

だが、「私の腕をのばすよう意志する」とはどういうことなのだろう。私にはなによりもまずその点がよく分からない。たんに腕をのばそうと意志するだけで、ほかに何もしないということを試みていただきたい。いったい何をすればよいのだろうか。「腕をのばそう」とつぶやくこと？ そうではないだろう。私はふだん腕をのばすときにそのようにつぶやくはしないし、つぶやいたところで、それだけではないささかも意志することではない。同様に、腕をのばすところを想像してみることもまた、意志することではない。いったい、「意志する」とは「何かをする」ことなのだろうか。「合図とともに一分間だけ腕をのばすよう意志してみよ」と言われたとしても、当惑するしかない。³⁾ 私には、「意志する」という心的な行為などありはしないと思えないのである。

丁

さらに、こちらの方が深刻なのだが、かりに意志するという心的な行為があったとしても、事態はまったく進展しないのである。例えば、いま議論のために、「腕をのばすことを意志する」とはまっすぐにのびた腕をイメージすることだと仮定してみよう。そしてわれわれ人間は、そのようにイメージするとそれが原因で実際に腕がのびるという傾向をもっているとする。そのとき

私は腕をのぼそうと思って、まずのびた腕をイメージし、結果として腕が実際にのび、そして私はその結果に満足する。なるほど、いま想定しているような事情のもとであれば、これに対して「私は私の腕をのぼした」と記述されるだろう。しかし他方、腕がのびたところのイメージが私の思惑とは無関係に突然湧き起こって、それが原因で腕がのびたとする。难道か知らないがトウトツにイメージが湧き起こり、それが原因で私の腕がぐいとまっすぐにのびる。私は「なんだこりゃどうしたんだ」と思うかもしれない。そのような場合、私が腕をのぼしたのだろうか。いや、「なんだこりゃ」と言わざるをえないようなものが自分の行為であるはずがない。私が腕をのぼしたと言われうるためには、私はそのイメージをたんに受動的に受け取るのではなく、自身の手で生じさせねばならないだろう。つまり、そのイメージもまた、「私が原因で」生じたのでなければならぬ。

ここには⁽⁴⁾いかんともしがたい構造的な欠陥がある。腕をのぼしたことが私の行為であるとされるためには、それは私がそう意志したことが原因となって生じたのでなければならぬ。ここに、「意志する」とはなんらかの心的な行為である。しかるに、その心的な行為もまた私の行為であるとされるためには、それもやはり私の意志が原因となっていなければならない。というのも、もし意志なる心的状態が私にはどうしようもない他の原因によって引き起こされたものであったとしたならば、その結果引き起こされた私の腕ののびもまた、私にはどうしようもない私以外の原因によって引き起こされたものになるしかないからである。かくして、私は私の行為として意志するものでなければならず、そして私の行為として意志するためにはさらに先立つ意志が要求されねばならない。かくして、きりがないのである。

少し違った角度から問題を述べ、別の解答の道を探ってみよう。

⁽⁵⁾ 私が扉を開けるときの、そこに二つの側面を区別することができる。ひとつは、この行為の「達成点」としての「扉が開いた」というできごとである。しかし、私のこの行為は失敗することもある。例えばそれが手前に引いて開ける扉であった場合、腕をのぼして開けようとした私の行為は失敗し、期待した達成点に到達しない。しかし、失敗するにせよ成功するにせよ、私はある程度同じことをしている。いまの場合は「腕をのぼす」という動作がそれである。そこでこれを「達成点」に対して「過程」と呼ぶことにしよう。しかるべき過程を経て「扉が開く」ことが達成されたから、これは「扉を開く」という行為とされる。もし同じ過程を

経て異なるできごと「扉が閉まる」が達成されたならば、それは「扉を閉める」行為とみなされるだろう。

すべての行為はこうした過程と、それがめざす達成点をもっている。そして、行為の達成点はなんらかのできごととなる。

「A」という行為の達成点は「B」というできごとであり、「C」という行為の達成点は

「D」というできごとである。そして、扉が開くということ、手があがるということ、これら達成点となるできごととそれ

自体は行為ではない。実際、扉が開くというできごとは風によっても引き起こされ、手があがるというできごとは痙攣によっても引き起こされるだろう。

では、過程に関してはどうか。私の行為を形作る過程は、それ自体なんらかの私の行為なのか、それとも行為ならざるたんなるできごとなのか。ここにデイレンマが生じる。

例えば、扉を開けたことの過程もまた私の行為であるというのは、私が腕をのばすことによつて扉が開くといった場合であり、その過程が私の行為ではないというのは、風が吹いたことによつて扉が開くといった場合である。そのとき、「扉が開く」というできごとを達成した過程が私の行為ならざるできごとであるとすれば、その過程と達成点の全体はもはや「私が扉を開けた」という行為とはみなされないものとなるだろう。だが、他方、その過程もまた私の行為であるとするならば、その行為に対して繰り返し同じ問いが問われねばならない。つまり、こうである。

ある行為が過程 a と達成点 α の対として分析される。

ここで過程 a もまた行為であるとされる。

それゆえ過程 a もまた過程 b と達成点 β の対として分析される。

ここで過程 b もまた行為であるとされる。

それゆえ過程 b もまた過程 c と達成点 γ の対として分析される。

ここで過程 c もまた……。

こうして、いつまでも続いていく。たとえその過程が「意志」と呼ばれたとしても、それはいささかもこの構図に対する免罪符

とはならないのである。

(野矢茂樹『哲学・航海日誌』による)

注 *アポリア∥解決の糸口を見いだせない難問のこと。

問一 傍線部(ア)(ウ)の漢字の読みを平仮名で書きなさい。

問二 傍線部(イ)(エ)(オ)(カ)の片仮名を漢字に直しなさい。

問三 傍線部(一)とあるが、筆者は「猫論争」を通してどのようなことを言おうとしているのか。最も適当なものを次の中から選び、記号をマークしなさい。

イ あるものの意志によるできごとは「誰かが為したこと」に分類されるが、そうでないできごとは「誰が為したのでもないこと」に分類されるということ。

ロ 「あるものに意志があるのかないのか」は科学者がどれほど詳しく調べてもそれで決着のつく問題ではないから、無益無用の問いであるということ。

ハ あるできごとがどのような場合に「誰かが為したこと」に分類され、どのような場合に「誰が為したのでもないこと」に分類されるのかが分からないということ。

ニ 人に意志があることは明白であるが、「あるものに意志があるのかないのか」はたとえあるものを解剖してみたところで分からないということ。

問四 傍線部(2)とあるが、筆者はこの例を通してどのようなことを言おうとしているのか。次の空欄に合うように文中から二
十四字で抜き出し、最初の五字を答えなさい。

「私が原因で」扉が開いたとしても、
行為とみなすことはできないということ。

が原因である場合、それを私の

問五 空欄甲〜丁のいずれかの箇所には「先の問いがまた繰り返される。」という一文が入る。最も適当な箇所を選び、記号を
マークしなさい。

問六 傍線部(3)とあるが、筆者がそのように述べるのはなぜか。最も適当なものを次の中から選び、記号をマークしなさい。

イ 腕がのびたところのイメージが私の思惑とは無関係に突然湧き起こって、それが原因で腕がのびることもあるから。

ロ 「腕をのばすよう意志してみよ」と言われたとしても、何をすればよいか分からないから。

ハ 筆者はふだん腕をのばすときに「腕をのばそう」とつぶやくことはしないから。

ニ 人間はまっすぐにのびた腕をイメージするとそれが原因で実際に腕がのびるという傾向をもっているから。

問七 傍線部(4)とあるが、これはどういうことか。次の空欄を四十字以上五十字以内で埋めて説明を完成させなさい。

腕をのばしたことが私の行為であるとされるためには、それは私が私の行為としてそう意志したことが原因となって生じたの
でなければならないが、
という

問八 傍線部(5)とあるが、「扉が開けるときの」における「二つの側面」とは具体的には何と何か。文中からそれぞれ十四字と十二字で抜き出して答えなさい。

問九 空欄A～Dに入るべき語句の組み合わせとして最も適当なものを次の中から選び、記号をマークしなさい。

- イ A 扉が開く B 扉を開ける C 手があがる D 手をあげる
ロ A 扉を開ける B 扉が開く C 手をあげる D 手があがる
ハ A 扉が開く B 扉を開ける C 手をあげる D 手があがる
ニ A 扉を開ける B 扉が開く C 手があがる D 手をあげる

問十 本文の内容に合致するものを次の中から二つ選び、記号をマークしなさい。

イ まっすぐにのびた腕をイメージすることは「腕をのばすことを意志する」ことといえ、それによって実際に腕がのびた場合には、それを私の行為とみなすことができる。

ロ 手を上げてみることは私の意志で為したことであるから私の行為とみなすことができるが、しゃっくりが出ることは私の意志で為したことでないから私の行為とはみなされない。

ハ あるできごとが私の行為であるためにはその原因が私の行為でなければならないが、この構図はいつまでも続いていくから、結局、私の行為は存在しえない。

ニ 私の腕が痙攣を起こし、その運動で扉が開いた場合、「扉が開く」というできごとを達成した過程は私の行為ならざるできごとであり、その過程と達成点の全体はもはや私の行為とはみなされない。

ホ すべての行為は過程と、それがめざす達成点をもっており、行為の達成点となるのはなんらかのできごとであるが、そのできごと自体は行為ではない。

ヘ 「腕をのばす」といった動作の原因をさらに求めるときりがないから、私の行為が存在するためには原因の探求はそこで打ち止めしなければならない。

〔二〕 次の文章は昭和二年に書かれたものである。筆者の柳宗悦（一八八九～一九六一）は、工業化によって大量生産の製品が溢れ始めた時代に、民衆の手仕事によって作られた日用品である「民衆的工藝」に「用の美」を認める「民藝運動」を始めた人物である。柳の言う「工藝」とは、この「民衆的工藝」を指す。柳はこの運動を始めるにあたり、イギリスの思想家ウィリアム・モリス（一八三四～一八九六）が主導した中世の手仕事に価値を置くアーツ・アンド・クラフツ運動の影響を大きく受けたとされる。次の文章を読んで、後の問に答えなさい。（字数制限がある場合、句読点・記号も一字と数える。）

工藝においては美も救いも他より恵まるる **A** である。自らのみでは何一つできぬ。器には自然の加護があるのである。器の美は自然の美である。何人も自然の恵みを受けずして、一つだに美しき作を産むことはできぬ。ある僧が云いしように、助ける者一人だになく、助けられる者のみがあるのである。工藝の美は恩寵の美である。

よき古作品を見られよ、いかに自然であり素直であるかを。どこにも作り物という感じがはないか。美には生れる美のみあって、作らるる美はないであろう。よしあろうとも永く保つことはできぬ。よき美には自然への **B** がある。自然に従うものは、自然の愛を受ける。小さな自我を棄てる時、自然の大我に活きるのである。

工藝は自然が与うる資材に発する。資材なくば、その地に工藝はない。工藝にはそれぞれの故郷があるではないか。異なる種類や変化やその味わいは、異なる故郷が産むのである。工藝の美はわけても地方色に活きる。それはある特殊な地方の特殊な物資の所産である。悉くが天然の賜物である。

よき形、よき模様、よき色彩を熟視されよ。そこに天然の加護がないものがあるか。人の力が作るとはいうも、そこに加わる自然の力に比べては、いと小さなものに過ぎぬではないか。よき作は天然よりの施物に活きる。工藝美は材料美である。材料への無視は美への無視である。

人為的に精製された材料が、自然のそれよりさらに美しさを示した場合があるか。どこか力弱く美に乏しいのは、人智への **C** による。そうして今日美が痛ましくも沈んで来たのは、自然への **D** による。だが自然に反逆の矢を向ける者

は、やがてその矢で自殺する時が来るであろう。正しき美は自然への信頼の徴である。ちようど一切を神にユダねる時、心の平和が契られるのと同じである。真に何事かをなし得るのはただ自然のみである。自然への服従、こののみが自由の獲得である。

なぜ手工が優れるのであろうか。それは自然がじかに働くからである。とかく機械が美を傷うのは、自然の力を殺ぐからである。あの複雑な機械も、手工に比べてはいかばかり簡単であらう。そうしてあの単純な手技は、機械に比ぶれば、いかばかり複雑であらう。機械の作が見劣るのは、自然の前にその力がなおも小さいしである。よき工藝は自然の御栄の讃歌である。

かく想えば工藝の美は、伝統の美である。伝統に守られずして民衆に工藝の方向があり得たろうか。そこに見られるすべての美は堆積せられた伝統の、驚くべき業だといわねばならぬ。試みに一つの漆器を想い浮べよ。その背後に打ち続く伝統がなかったら、あの驚嘆すべき技術があり得るであらうか。その存在を支えるものは一に伝統の力である。人には自由があると**言い張る**かも知れぬ。だが私たちには伝統を **E** 自由が与えられているのではなく、**伝統を** **F** 自由のみが許されているのである。自由を反抗と解するのはあさはかな経験に過ぎない。それがかえってコウソクに終らなかつた場合がどれだけあろうか。個性よりも伝統がさらに自由な奇蹟を示すのである。私たちは自己よりさらに偉大なもののあることを信じてよい。そうしてかかるものへの帰依に、初めて真の自己を見出すことを悟らねばならぬ。工藝の美はまざまざとこのことを教えてくれる。

彼らのはかかる恵みに支えられて、働きました働く。多くは貧しい人々であるから、安息すべき日さえも与えられておらぬ。多くまた早く作らずば、一家を支えることができぬ。働きは衆生に課せられた宿命である。だがそこには、何かまた温かき意味が匿されていまいか。正しき者は運命に甘んじて忙しく日を送る。働きを怠る者は、いつか天然の怒りを受ける。課せられた日々の働き、このことがまたどんなに彼らの作を美しきものにさせたであらう。否、彼らの作に美を約束することなくして、神は彼らに労働を命じはしないのである。彼らの一生に仕組まれた摂理は、終りまで不思議である。

彼らは多く作らねばならぬ。このことは仕事の限りなき繰り返しを求めぬ。同じ形、同じ模様、果しもないその反復。だがこの単調な仕事は、酬いとしてそれらの作をいや美しくする。かかる反復は拙き者にも、技術の完成を与える。長い労力の後には、どの職人とてもそれぞれに名工である。その味なき繰り返しにおいて、彼らは彼の技術すら越えた高い域に進む。彼らは何事をも

忘れつつ作る。笑いつつ語らいつつ安らかに作る。何をやるかを忘れつつ作る。そこに見られる美は驚くべき熟練の所産である。それを一日で酔かされた美と思つてはならぬ。あの粗末ないろいろな用具にも、その背後には多くの歳月と、飽くことなき労働と、味けなき反復とが潜かんでいる。粗末に扱われる雑具にも、技術への全き支配と離脱とがある。よき作が生れないわけにゆかぬ。彼らの長い労働が美を確実に保証しているのである。見よ、いかばかり自由になだらかに作られているであろう。手に信賴しきつているではないか。すでに彼らの手が作るというよりも、自然が彼らの手に働きつつあるのである。

反復が自由に転じ、単調が創造に移るとは、運命に秘められた備えであろう。働きこそ救いへのよき準備である。正しき工藝はよき労働の賜物である。⁽³⁾働きが報いなき苦痛に沈んだのは、近代での出来事に過ぎない。



よき作を、ゆめ一人の作と思つてはならぬ。そこには真に協力の世界が見える。ある者は形を、ある者は絵え附つけを、あるものは色を、ある者は仕上げをと幾つかに分れて仕事を負うた。優れたほとんどすべての作は一人の作ではなく合作である。あの力もなき民衆がすべてを一人で担わねばならないなら、何の実をか結び得ようや。よき作の背後にはよき結合が見える。まして貧しき工人である。相寄り相助けずば、彼らの生活に安定はない。安定を保証するものは相愛である、一致である。彼らは自ら協団の生活を結ぶ。それは共通の目的を支持する相互補助の生活である。正しき工藝はかかる社会の産物であった。

されば一人の作が優れたのではなく、協団に属するすべての者の作が優れたのである。協団は民衆への救いであつた。良き工藝史は良き協団史である。工藝美は社会美である。一個の作が美しいのではなく、多くの作が同時に美しいのである。あの協団の時代であつたゴシックの作を見よ、かつて醜い作があつたであろうか。工藝の美は「**G**」の美である。「共に救わるる美」である。個人作家が現れたのは、協団が破れ個性が主張せられた近代での出来事である。だがあの合作である古作品の美を越え得たものがあつたであろうか。そうして彼らよりも創造的な作を産み得た場合があつたであろうか。工藝の美は共に生きる心から生れる。

そこは集団の世界であるから自ら秩序が要求される。乱れた社会の組織からは、正しき工藝を予期することができぬ。よき器に

は常に秩序の美が映る。秩序は道徳である。徳を守る世界において粗悪なる品質や、粗雑なる仕事が許されようや。工人たちは正しき組織に住んで誠実の徳を支えた。よき品とは信じ得る品との義ではないか。便り得る器との謂ではないか。作の美は信用の美である。材料の選択や仕事の工程に対し、正直の徳を守らずして、どこによき工藝があるうか。工藝の美が善と結合しなかつた場合はない。美が善でないなら、美たることもできぬ。

あのボンヨウな民衆個々に、善の力があつたのではない。だが結合と秩序とは彼らから悪を駆逐した。このことなくして民衆に何の徳が保たれようや。今日ほとんど見るべき作がなくとも、罪を工人たちに帰すわけにゆかぬ。何が美しい作たるかを識らない彼らは、何が醜い作であるかを識らないであろう。すべての罪は秩序の乱れた制度による。もし社会に上下の反目や貧富の懸隔が生じるなら、どこによき労働があり、どこによき協力があり得よう。そこにはただ誠実への放棄と仕事への忌避と、そうして私益への情熱のほか何もなくなるであろう。相愛の社会がくずれる時、美もまたくずれてくる。醜い工藝は醜い社会の反映である。善きも悪しきも社会は工藝の鏡に自らの姿を匿すことができぬ。

私は工藝の美を想い、ついに秩序の美を想う。正しき社会に守られずば、工藝の美はあり得ない。美の消長と社会の消長と、二つの歴史はいつも並ぶ。工藝への救いは社会への救いである。現実と美とが結ばれる時、大衆と美とが結ばれる時、その時こそ美に充ちる地上の王国が目前に現れるであろう。この大なる幸福へ私たちを導くもの、それは工藝を置いて他にはあり得ない。

かく想えば工藝にも数々の福音が読まれるではないか。その美が教えるところは、宗教の言葉と同じである。美は信であると言い得ないであろうか。正しき作を見る時、そこにも説くなき説法が説かれてある。一個の器も文字なき聖書である。そこにも帰依や奉仕の道が説かれてある。救いの教えも読まれるではないか。この蕪雑な現し世も、美の訪れの場所である。そうして下根の凡夫も救いの御手に渡さるる身である。何人にも許さるる作、誰もが用いる器、汗なくしてはできない仕事、それが美の浄土に受け取られるとは、驚くべきこの世の神秘ではないか。それは美によって義とせらるる神の王国を、地上に示現しようとの密意である。

工藝は私にかく教える。

(柳宗悦『工藝の道』による)

注 *下根の凡夫〓仏教用語。仏道を修める性質・能力が劣っている者のこと。

問一 傍線部(ア)(ウ)(オ)の片仮名を漢字に直しなさい。

問二 傍線部(イ)(エ)(カ)の漢字の読みを平仮名で書きなさい。

問三 空欄Aに入るべき語を文中から漢字二字で抜き出して答えなさい。

問四 空欄B〓Dに入るべき語句として最も適当なものをそれぞれ次の中から選び、記号をマークしなさい。ただし、同じ記号を二度以上用いてはならない。

イ 無益な反抗 口 自由の獲得 ハ 忠実な従順 ニ 過剰な信頼

問五 傍線部(1)とあるが、それはどういうことか。最も適当なものを次の中から選び、記号をマークしなさい。

イ 器は人の手によって作られるが、器の美は自然に由来する材料に多くを負っているということ。

口 人は新たな材料を作り出したが、そこから生み出される美は自然の美には及ばないということ。

ハ 人は機械によって器を作るようになったが、そこには自然の力が全く働いていないということ。

ニ 器は自然によって作られるように見えるが、実際には人の力が器を作り出しているということ。

問六 空欄E・Fに入るべき語として最も適当なものをそれぞれ次の中から選び、記号をマークしなさい。ただし、同じ記号を二度用いてはならない。

イ 諦める 口 形成する ハ 試す ニ 温存する ホ 活かす ヘ 破壊する

問七 傍線部(2)とあるが、貧しい人々に宿命として課せられた労働によって美が約束されるのはなぜか。四十字以上五十字以内で説明しなさい。

問八 傍線部(3)とあるが、筆者はこの後の部分でそのことをどのように説明しているか。最も適当なものを次の中から選び、記号をマークしなさい。

- イ 近代以降、労働の対価が資本家に搾取されるようになり、労働に対する喜びが失われてしまったということ。
- ロ 近代以降、個人主義の時代が始まり、個人間の競争が激化することで苦痛を感じるようになったということ。
- ハ 近代以降、協力よりも個性が主張されるようになり、秩序が乱れてよき労働が失われてしまったということ。
- ニ 近代以降、工人たちの創造性が失われてしまい、何が醜い作なのかもわからなくなってしまったということ。

問九 空欄Gに入るべき語として最も適当なものを次の中から選び、記号をマークしなさい。

- イ 古
- ロ 多
- ハ 個
- ニ 信

問十 傍線部(4)とあるが、工人たちの悪とは何か。具体例を文中から三つ抜き出し、それぞれ六字で答えなさい。

問十一 筆者は「工藝の美」を三つの観点から論じている。筆者によると、「工藝の美」はそれぞれ何の美から成り立っているか。その組み合わせとして最も適当なものを次の中から選び、記号をマークしなさい。

- イ 社会の美・信用の美・反復の美
- ロ 伝統の美・反復の美・熟練の美
- ハ 自然の美・大我の美・恩寵の美
- ニ 材料の美・伝統の美・秩序の美